

5. 黒崎町の婚姻儀礼について

谷 口 和 美

- I はじめに
- II 結婚式の形式と変化
- III 変化の要因についての考察
- IV おわりに

I は じ め に

私は黒崎町の調査を進めてゆくうちに、多くの方から昔の黒崎の結婚式のことをうかがった。その話を聞くにつれて、その過去に行われていた、黒崎を含むこの地域の結婚式の独特のしきたりに私は興味を覚えた。しかし、私が疑問に思ったのは、その独特な結婚式が現在に行われていないことが多い、ということである。そこで次節ではまず結婚式の変化について記述し、続く節でその変化をもたらしたものについて考察する。

II 結婚式の形式と変化

結婚式の形式と変化を述べるに当たり、1955（昭和30）年ごろから、結婚式に変化が見られることが多かったので、黒崎の過去の独特な結婚式を1950年代前半までの結婚式（「嫁取り」といわれる）として取り上げ、現在の形態と比較してみる。

(1) 1950年代前半までの結婚式の背景

この当時の結婚式について様々な人に話を聞いた。恋愛は少なく、ほとんど恋愛結婚は皆無であったが、しかし見合い結婚というのでもなかったらしい。それはほとんどの結婚が黒崎の村人同士の間で行われていたので、今更見合いをしなくても相手がどういう人物なのか分かるからであった。昔は村中が親戚みたいなものだったという人もいた。結婚相手の選択をはじめとして、結婚という儀礼はすべて親が管理していたといえる。

男は25歳までに嫁をもらい、女は20歳では遅く、19歳までに嫁にいていた。昔は黒崎において、村の女性が他の村に嫁ぐと笑われたという。それは海に潜れない女はワカメ取りなどができないため役立たず者とみなされ、村内では結婚できないということになるからであった。ワカメ取りは当時、最大の現金収入であった。

(2) 1950年代前半までの結婚式の過程

適齢期になると、新郎側の叔父、叔母が、相手の家へ、その娘を嫁にくれと、何度も頼みにゆく。そろそろ結婚が決まりそう、という日に新郎、もしくは仲人が二升酒（手打ち酒）を持参し、それを新婦の家の玄関においておく。この場合仲人は新郎側の姉婿や叔父になることが多い。

そして正式に結婚が決まるとすぐにその酒をあけて、皆で飲み交わす。この儀式は「二升を開く」といわれ、これにより結婚が決定したとされる。

結婚することが決定してから、結納が行われる前に、「お歯黒祝い」がなされる。これは花嫁のお別れ会であると言え、新婦の家でその親戚を招いてもてなし（およばれ）をするのである。

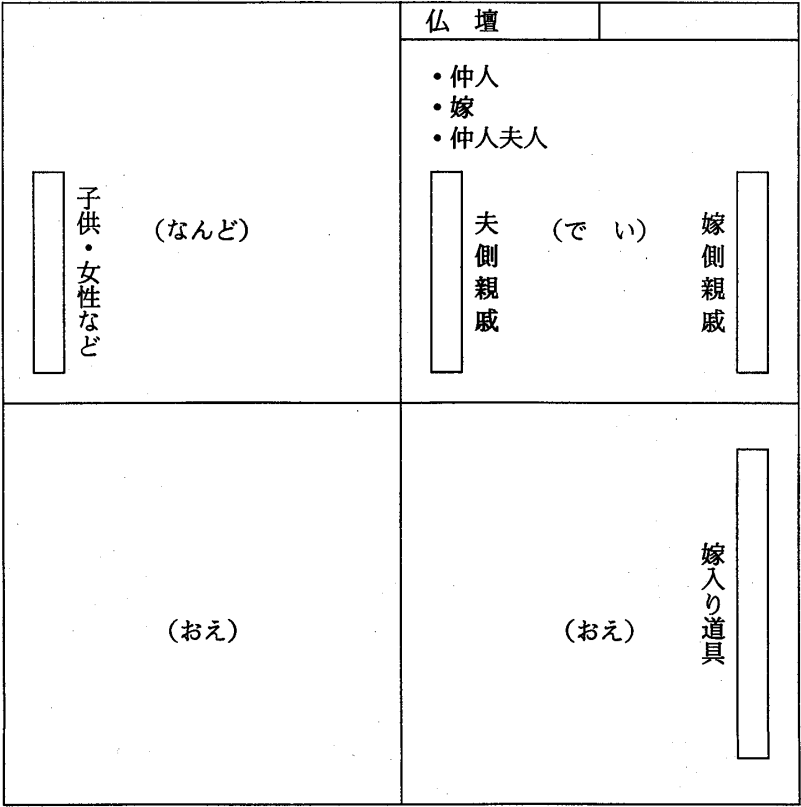
次に行われる「結納」は、形式はだいたい現在と同じである。仲人が新婦の家にやってきて新郎側からの結納の品を渡す。結納の品は、するめ、酒、結納金などで、その数量はその家の経済状態によってさまざまであった。

そのあと「婿呼びの儀式」が行われる。それは新婦の家を仲人と新郎が訪問して、そこに新婦側の親戚が集まってもてなしをする儀式である。

次は「しきいまたぎの儀式」である。新婦とその母親、仲人が新郎の家を訪問し、そこでもてなされる。この儀式が終わって初めて、新婦は自由に新郎の家に入ることができるようになる。

結婚式は農閑期の11月から2月に行われることが多かった。それは農閑期のため暇があるのと、ものが腐らないという利点からだったと思われる。

結婚式の1週間ほど前に「道具持ち」が行われる。これは結婚に際し、新婦が新郎の家に持っていく嫁入り道具を家の内の「おえ」（図－1 参照）の片側に並べて、それを近所の人などに見せるのである。



図－1 家の見取り図 （ ）内は部屋の名称

そして結婚式の日の朝に「道具渡し」が行われる。新婦側の親戚がその嫁入り道具を新郎の家に運び、彼らはそこでもてなしを受ける。この嫁入り道具は今度は新郎の家の内のおえの片側に並べられ、それを新郎の家の近所の人が見に来たりする。

結婚式は夜に行われるので、仲人が紋付き袴を着て、弓張り提灯をもって、新婦の家へ花嫁を迎えに来る。黒崎のある男性によれば、人の世話をする人のことをいう「提灯持ち」という言葉はここから来たのでは、ということだ。

新婦が新郎の家に到着すると、その玄関でかわらけ（素焼きの杯）の中に両家の家の水を混ぜた水杯を飲む。そしてその杯を落として割ってから、新郎の家に入る。

家に入ってから、まず仏壇にお参りをする。それから三三九度の杯を行ったあと、新郎は結婚式の場から離れ、お勝手（台所）へ回る。そして酒の燗など裏方の仕事をする。新婦は皆が宴会をしている間中、宴会の場にいないなければならない。

結婚式には両家の親族関係の近い人が参加する。結婚式を行う会場は大体、新郎の家だった。部屋の戸を全部外し「四つ柱」にして行われた（図-1参照）。「四つ柱」は人寄せするときなどに、戸を全部外して、柱を4つにすることである。

結婚式の参列者は、置かれているお膳の前に並べてある、前日に両家の親戚が作った「取り魚」と呼ばれる、いろいろな煮付けなどのごちそうを食べながら酒を飲み宴会をする。お膳は家に持って帰り、それぞれの家で食べる。また、結婚式を見に来た近所の人などに、昔は新郎の家が甘酒（ひき酒）を振る舞っていた。

また婚家へ若い衆（青年団）がやってきて、雪やわらじ、泥を奥へ投げる。これは「つぶし」を打つといわれるが、そこには、花嫁に対して「戻ったらダメだぞ」や「これから辛抱しなさいよ」という意味が込められていた。これは結婚に対する祝福と激励の行事であった。

式の次の日、「朝茶」が催される。これは女性たちが集まって、前日の結婚式の残り物やお茶などを飲みながらおしゃべりする会である。朝茶には新婦のほか、結婚式に呼ばれなかった親戚や近所の女性も参加する。

その後、現在では新婚旅行に行くが、当時は行く人はほとんどいなかった。暮れの11月から3月に結婚した場合、4月25日の吉崎参りが新婚旅行の代わりだった人もいる。

夫婦が新婚旅行に行っている間に、近所の人などが着物などを見に来る。

結婚式が終わってから「打ち上げ」が行われる。これは結婚式に参列した人を、改めて今度は新婦の家が招いてもてなしをする儀式である。

旅行後、「中戻り」といって新婦はお土産を持って里帰りをする。この時嫁を姑が送っていき、もてなしを受ける。

また、「つれまじり」といって、嫁のつれ（つれ＝黒崎における3歳ごとの同性の集まり）を夫の家が招待する儀式も機会を見て行われる。

以上が1950年代前半までの黒崎の結婚式の過程である。

(3) 今日の結婚式の過程

今日の結婚式の形式は、全国的に行われている結婚式とほぼ同じである。結婚相手は黒崎の人同士ということは全くなくなり、通婚圏は全国各地へ広がっている。

1950年代前半までの結婚式と比較しながら今日の結婚式の流れを述べてみる。まず「二升酒の儀式」は戦後の物資不足の時、一時期なくなったが、現在は一升酒を仲人が新婦の家へ持っていくようになり、これで結婚を決定する。しかし加賀市や小松市など比較的に近い地域の人と結婚するときは行われているが、遠い地域の人と結婚するときは行われない場合もある。

次の結納は以前と形式は同じである。結納の品は、水引やするめ、着物、結納金などである。そして結納返しとして今度は新婦側から、新郎の家族全員にそれぞれお土産を渡す。お土産の品は反物（ウールなど）が多い。

結納が終わると、「御神酒開き（結納開き）」が行われる。これは1955年ごろから始まり、新婦側が両方の親戚にするめ1枚と酒2合を贈る。

婿呼びやお齒黒の祝い、しきいまたぎ、道具持ちは現在は行われていない。

道具渡しは結婚式の当日ではなく、その前の大安吉日の日に行われる。嫁入り道具を新郎側に渡したあと、新婦側は新郎側にその道具の目録を渡し、受け書（受取書）をもらうようになった。

結婚式の当日、仲人の奥さんと「迎え女郎」と呼ばれる新郎側の親戚の小さい女の子が花嫁を迎えに来る。（婿入りの場合は、仲人と花嫁と新婦側の親戚の小さい男の子が新郎を迎えに行く。）花嫁が新郎の家に着いてから、見に来た近所の人などに白とピンクの饅頭を配る。

結婚式は結婚式場で行われる。新郎新婦、両親戚など式の参列者は一緒に式場へ向かう。

結婚式のあと、遠い親戚や近所の人など、結婚式に参列しなかった人を家に招いて、披露宴をすることもある。しかし新郎新婦はすでに新婚旅行に行っているため、代わりに新婦の親が挨拶をする。

新婚旅行後、新婦とその母親、姑が近所や親戚に「挨拶まわり」をする。大体ふろしきを配ることが多く、箱に入れて、表に新婦の名前を書き、時には相手の名前を書いて配ることもある。

嫁のつれを夫の家が招待する「つれまじり」は現在も行われている。

Ⅲ 変化の要因についての考察

1955年頃から起こり始めた結婚式の変化について、この節で考察してみる。

儀式の変化についてひとつひとつ分析すると、まず「手打ち酒」については、先にも述べたように、戦前までは二升酒が使われていた。しかし戦後、物資不足となったときに、酒が足りなくなったので行われなくなった。その後、経済も回復し、この手打ち酒の儀式は再び行われるようになったが、交際範囲が広まり、通婚圏が他村にも広がると、いつのまにか二升酒ではなく、一

升酒が使われるようになった。これは、「手打ち酒」として一升酒を使う、黒崎とは別の地域の風習が、黒崎における婚姻儀礼に影響を与えたためだと考えられる。実際に、小松市の方では、昔から一升酒が使われており、そこから黒崎においても一升酒を使うようになった、という話も耳にした。

次に「結納」については、形式は現在も昔も余り変化はないが、経済の高度成長につれ、だんだん豪華になっていったと考えられる。「結納返し」として、家族にお土産を渡すようになったのも、その結果であるといえる。

「御神酒開き（結納開き）」については、1955年頃から始まったのであるが、これはこのころまで物資不足で、どの家も大変だったので、新郎側からもらった結納の品を、新婦側が両方の親戚に配るようになったのが始まりで、現在まで行われている。

次に「お歯黒祝い」や「婿呼びの儀式」、「しきいまたぎの儀式」などが、現在行われていないことについては、1955年頃、政府が生活改善のために、質素倹約を奨励し、冠婚葬祭が改革され、簡素化されたことが原因であるとよく聞いた。この生活改善の考えが、黒崎の集落にも影響を与え、婚姻において、簡素化として儀式が省かれたり、その頃、贅沢な着物は使われなくなり、一時期、魚も鯛からカレイに変化したこともあった。

また、結婚式の当日に行われていた「道具渡し」が、結婚式の日の前に行われるようになったのは、以前は夜に行われていた結婚式が、昼に行われるようになったためである。また現在、嫁入り道具を渡したときに、目録を渡したり、受け書をもろうようになったのは、先に述べたように、通婚圏が拡大した結果、他の地域から入ってきた風習のひとつであると思われる。

結婚式の当日、仲人が「弓張り提灯」を持って、花嫁を迎えに来ていたのも、結婚式が昼に行われるようになったため、現在では行われていない。

結婚式自体については、以前は新郎の家で行われていたが、大聖寺市街地に結婚式場ができた1975年頃から、結婚式場で行われるようになった。そのため、それまで行われていた黒崎独特の結婚式は行われなくなった。現在では、黒崎の人の結婚式の多くは、大聖寺市街地にある結婚式場を利用している。

「朝茶」は現在、結婚式が昼に行われ、そのあと新郎新婦が新婚旅行に行ってしまう、次の日はいないので行われてはいない。

「打ち上げ」や「中戻り」も冠婚葬祭が簡素化されたときに行われなくなった。

「挨拶まわり」もまたよそから入ってきた風習のひとつであると言える。通婚圏が拡大して、よそから嫁が来るようになり、それを改めて紹介するために行われるようになった。

以上がそれぞれの儀礼の変化についての考察である。これらの変化の要因について、いろいろな原因を挙げることができる。

ひとつは、もともと黒崎においては村内結婚が主であった。しかし戦後、交通手段の発達や、

経済の発展などから交際範囲が広まり、通婚圏が拡大した。このことから、黒崎独自の風習に、他からの風習の影響が及び、儀礼が変化した。

また婚姻の形式について、さまざまな変化が1955年ごろを境に起こったことが分かった。これは当時、政府が生活改善のために質素儉約を奨励したことが原因のひとつであると考えられる。このため、冠婚葬祭が改革され、簡素化された。

それから経済の高度成長につれて、結婚式はだんだん華美に、豪華に変化していった。そして結婚式場ができ、結婚式の場所が家から結婚式場へ移った。

これらの様々な要因がミックスされて、現在の黒崎における婚姻を形成していると考えられる。

IV お わ り に

黒崎における婚姻の形式は時代と共に大きく変化してきた。

過去に行われていた黒崎の集落の独特な結婚式は、戦争をきっかけとして起こった社会の変化や、また交通手段の発達によってもたらされた交際範囲の拡大によって変化し、全国的に行われている結婚式と同一化してきている。

これはまた結婚式場など、ブライダル産業が発達し、それによる結婚式が増加したことも原因であると考えられる。

現在も結婚式の形式は変化の途中にある。しかし一方では現在でもやはり、黒崎にはこの地域独特のしきたりも残っているし、また世代によってその結婚式に対する受けとめ方もさまざまである。例えばある家に、石川県外から嫁が来たが、その家の新郎の親は、「やはりある程度のしきたりは合わせてもらわなければ親戚に顔が立たない」と言って、結納などの時に、花嫁側に頼んだと言っていた。

しかし、また嫁が他の地域から来て結婚した夫婦の子どもの結婚式では、この地域独特とは言えない結婚式を行った、という家もあった。

このように世代交代、他から来た人の影響などから、結婚式の形態はこれからも変化していくのではないだろうか、と私は思う。